

フレーベルにおける学校教育学の構想に関する一考察

豊 泉 清 浩

キーワード：フレーベル、ヘルバ・プラン、国民教育施設

はじめに

- 1 『人間の教育』の全体の概観
 - 2 ヘルバ・プラン
 - 3 フレーベルの学校教育学
- むすび

はじめに

フレーベル (F.W.A.Fröbel,1782-1852) の教育学は、当初、学校教育学の構想に力点を置きながら展開していった。というのは、彼は、スイスのブルクドルフで活動している間に、幼児の保育と家庭の改革という構想へと重点を転換する以前は、学校構想によって教育改革を行なおうと考えていたからである。

そこで本稿では、フレーベルにおける学校教育学の構想に関して、次の点を考慮しながら考察していく。まず、『人間の教育』の末尾にある全体の概観に注目して、少年期の教育は、職業教育との関連は持ちながらも、基本的に普通教育を行なうというフレーベルの見解を明らかにする。次に、「ヘルバ・プラン (der Helbaer Plan)」における「国民教育施設 (die Volkserziehungsanstalt)」の構想において、カイルハウでの「基礎づける教授 (der begründende Unterricht)」がいかにか継承されているかについて考察する。最後に、ハイラント (H.Heiland,1937-) の見解に依拠しながら、『人間の教育』における学校教育学とヘルバおよびブルクドルフでの国民教育施設の計画を中

心に、全体的なフレーベルの学校教育学の構想について概観する。

フレーベルの学校教育学は、基本的にカイルハウの「基礎づける教授」の域を脱することなく、国民教育施設の計画へと発展する。したがって、「継続する教授 (der weiterführende Unterricht)」による教授計画理論は、断片的なものに留まっていた。それゆえ、本稿の目的は、『人間の教育』における学校教育学から、その後の国民教育施設の計画への展開においても、基本的には「基礎づける教授」が中心になっていること、また彼の学校構想における諸教科が、家庭と学校の結合という観点から展開されていることを明らかにすることにある。

1 『人間の教育』の全体の概観

フレーベルは、当然のことながら、少年の生命の中に現われてくる多くの現象は、決してまだ特定の方向を持っていないと理解している¹。たとえば、色をぬる作業に従事しても、それは決してまだ画家を意図するものではないし、音や唱歌の練習をしても、決してまだ音楽家の育成を目指すものではない。これらの作業が目的としていることは、人間の本質を、少年の中に全面的に発展させ、表現させることだけである。つまり、少年期の教育は、職業教育を意識しつつも、諸教科において基本的に普通教育を行なうという意図が保持されている。

フレーベルは、次のように述べている。「神は、接木したり、芽接ぎしたりはしない。したがって、人間の精神もまた、神的な精神として、接木などなされるべきではない。しかし、神は、最も小さなもの、最も不完全なものをも、永遠に自己自身のなかに根拠をもち、自己自身のなかから発展してゆく、永遠の法則にしたがって、絶えず上昇させながら、発展させるものである。そして、神性こそは、じつに、人間の、思索や行動上の、最高の目標でなければならない。特に、人間が、自分の子どもたちにたいして、神が人間にたいする場合のように、父としての関係にたつ場合には、とりわけそうでなければならない²と。この文章で注目される点は、神が永遠の法則に従って人

間を発達させる場合、そこにおける神と人間の関係と同じように、人間が自分の子どもたちに対して、父としての関係に立つことになると考えている点である。フレーベルによれば、神の国は、精神的なものの国であり、人間の中心にある精神的なものは、精神の国、神の国の一部である。「したがってまた、われわれは、人間のなかにある、われわれの子どもたちのなかにある、精神的なものの普遍的な形成にこそ、本来の意味で人間的なものの、すなわち個別的な現われとしての神的なものの、形成にこそ、さらにまた神的なものそのものにこそ、われわれの注意を捧げるべきであろう。」³

フレーベルは、少年初期の教育は、普遍的、基礎的な教授を中心にして、職業に直結する教授だけを行なわないのかという疑問に対して、次のように述べている。「しかし、一般に、少年時代において、しかも人間の教育および発達のかなかで、ゆるがせにされ、なおざりにされたものは、決して取りもどせるものではない。われわれは、人間として、また父親として、おそらくはまた母親としても、最後には誠実でありたいと欲しないであろうか」⁴と。つまりフレーベルは、少年初期の教育は、人間としての教育の基礎になるものであると確信している。だから彼は次のようにいう。「われわれは、一般に、われわれ自身の青年時代を回顧し、吟味することを、軽んじている。この回顧からこそ、われわれの幸福や子どもたちの幸福のために、きわめて多くのことを、学ぶことができるかもしれないのに。なぜなら、心をこらして汝ら自身の青春に立ち帰れ、そして、汝らの心情の永遠の青春を目覚まし、温め、活気づけよ、というこの要請や、この精神も、『幼な子のようになれ。』[マタイ一八の三]というイエスの言葉や、イエスの要請のなかに含まれているものなのだからである。それは、イエスが、かれの時代に、かれと同時代の人々に向かって、語った多くのことを、精神が、われわれの時代に、われわれに向かって、いまもなお、語りかけているということが、一般に、真実であるのと同様である」⁵と。人間は、少年期や青年期を回顧することを通して、幸福になるために多くのことを学びうるという考えは、イエスの要請と一致するものなのである。

フレーベルは、『人間の教育』において述べてきた、教育の方法を、「開発的な教育の方法および教授の方法」⁶と称しているが、それによって、人間が獲得した形式の段階および目標を概観して、一点に総括してみると、次の点が極めて明確に浮かび出てくる、と考えている。すなわち、少年は、独立の精神的な自我と本質とを予感するようになっていくし、少年は、自己を一つの精神的な全体と感じ、かつ認識しているということである。したがって、一つの全体を、その統一性および多様性において、自己の中に受け入れる能力が、少年の中に呼び起こされている。われわれ人間は、すでに少年初期に、人間の本質つまり神的な本質の表現に対する能力を、自己の中に持っていることを見出し、認識するのである。この能力を高め、それに熟練と確実さを与えることやそれを自覚させることなどに、少年期以降の人間の将来の生活が捧げられるとフレーベルは考え、そのための方法および手段を証示すること、およびそれを生活や現実の中に導入することにこそ『人間の教育』の続篇と彼の生涯が捧げられると当時自覚していたが、続篇は書かれなかった。ただし、『人間の教育』の基本思想は、その後のフレーベルのあらゆる著作の根底を貫くものになったのである。

2 ヘルバ・プラン

1826年以降、カイルハウ学園は、財政的困窮および生徒たちの相次ぐ退学により、危機的状況に陥っていた⁷。フレーベルは、この危機を打開する方策として、学園をさらにヘルバに設立するために、1827年から1829年にかけてフォン・マイニンゲン侯爵と交渉し、契約が結ばれるに至った。それにもかかわらず、結局この計画は実現されず、挫折した。

1828年からフレーベルとマイニンゲン公との間でこの計画に関する協議が始められ、1829年初春、「マイニンゲンのそばのヘルバにおける国民教育施設および同時にそれと結びつけられた、3-6歳の孤児のための保育と発達の施設に関する公告 (Anzeige von der Volkserziehungsanstalt in Helba, ohnweit Meiningen, und von der zugleich damit verbundenen Pflege= und

Entwicklungsanstalt für 3-6jähr.Waisen)」が出された。これが、「ヘルバ・プラン」と呼ばれるものである。この計画は、マイニンゲンのヘルバに設けられるべき、7歳から14歳までのすべての子どもを対象とする、国民教育施設の構想である。

フレーベルは、「この学園の教育および教訓はすべての真の認識や、すべての真の生活技術がそこから高まる根拠、即ち、生活そのものと自己創造に基づいており、行為と思惟、表示と認識、技能と知識との間の統一や相互作用に基づいているので、この学園をわれわれは基礎づける学園と呼ぶのである」⁸と述べている。この学園の活動は、自己活動や自己表示から出発する。学園は、一日の半分を外的な作品のための主な活動である労作に割り当て、また半分を内的なものを外的なものにおいて考えながら把握するための主な活動である教訓や教授に割り当てる。教訓や教授は一日の初めの半分を占め、そこでは精神がより自由であり、労作は一日の後半を占める。「労作および外的活動の対象は生活、特に田園生活が多くての家族集団に提供するすべてのものである。」⁹ フレーベルは、労作、教授、遊戯は、細分することのできない生命全体、そして将来分割されない、活動力があり理解力のある喜ばしい生活の真の根拠、となるべきものである、と考える。それゆえ、この教育施設は、「基礎づける学園 (begründende Anstalt)」と呼ばれる¹⁰。

少年の教育、とりわけ人間への教育は、この学園が基づく基礎である。この学園における教授の対象は、自己や神や自然や人間の認識、つまり倫理学、宗教、自然学(地理学等も含まれる)、歴史であり、すべての純粋に人間的な表現手段や認識手段、つまり母国語の知識と習得であり、空間の知識、すなわち数学、形態学、幾何学および図画であり、色彩の知識、すなわち色彩感覚の練習であり、音の知識、すなわち唱歌と音楽である¹¹。したがって、外国語と古典語は除外されている。そして、この学園は、民族のもとに最高なものや最善のものを守り育成しようと努めるので、国民教育施設と呼ばれる¹²。

この学園への入学には7歳から14歳ぐらいまでの時期が自由に与えられている¹³。この学園の卒業生の進路は、実社会に出て徒弟(見習)として職業

に就くか、マイニンゲンの師範学校、ギムナジウム、一般ドイツ学園（カイルハウ学園）などへ進学するものと考えられていた¹⁴。このように、ヘルバの国民教育施設は、「万民就学の基礎的統一学校」¹⁵として構想されていた。

また、「ヘルバ・プラン」で注目すべきことは、国民教育施設に、母親および3歳から7歳までの男女の子どもたちのための「保育と発達の施設 (Pflege- und Entwicklungsanstalt)」¹⁶が付設されるべきことが主張されている点である。フレーベルは、1829年2月18日のパーロップ宛ての手紙で、次のように述べている。「すでに長いあいだわたしは三歳から七歳までの幼児たちの教育と世話に取り組んできました。一瞬時に凝縮した思想や状況や影響などの総体が、学園と同時に、三～七歳の両親もしくは母親のない（資力ある境遇の）男女児童のための保育ならびに教育の施設をヘルバに開設する決心をわたしにさせたのであります。この学園は、これまでそれと同様な学園が呼ばれている、いわゆる幼児学校（シューレ）なる名称では呼びません。なぜならこれは学校であってはならず、子どもたちはここでは学校教育を施されるのではなく、自由に発育することになっているからであって、自らがまだ天使ではない人間にとって可能な程度にはあるが、人間の中の神性は大切に保護され育てられなくてはならないからであります」¹⁷と。この「保育と発達の施設」は、当時の幼児学校や託児所とは異なる、就学前の保育と教育を目標とする幼児教育施設の構想と考えられよう。この意味において、「ヘルバ・プラン」には、のちの幼稚園につながる構想が内包されていると見ることができる。

ところで、ハイラントによれば、「ヘルバ・プラン」の陶冶構想は、時期的にはまだフレーベルのカイルハウでの活動時期と密接な関係にあるが、しかしすでに、フレーベルの30年間のより広範な諸計画を注意するよう指示する¹⁸。その諸計画は、カイルハウにおける「基礎づける教授」の学校教育学よりも、表現する行為、産出を、まさにはっきり際立たせる。その際、教育施設の有機的組織を伴う「ヘルバ・プラン」は、無類の記録である。

この陶冶構想は、3－7歳の孤児のための保育施設から出発し、国民教育施設がそのあとに続き、それに基づいて、一方ではギムナジウムとしてのカ

イルハウが、他方ではより高いドイツの職業のための予備学校（ドイツの芸術やドイツの職業のための教育施設）がある¹⁹。カイルハウは、「芸術学校」への移行あるいは大学における学業へ導き、「実業・予備学校」は、「工芸学校」（実科高等学校ないし工業専門学校）へ導く。成人のための実業補習学校（「自己形成のための施設」）が、この段階づける学校制度を完了する。

「系統立てる教授」の脈絡における国民教育施設の表現と産出に、人間の特別な活動分野、すなわち学問、芸術、職業が続く。それらは、対応しながら継続する学校あるいはより高度な学校（一方ではカイルハウのギムナジウム、他方では「ドイツの芸術とドイツの職業のための教育施設」）によって、それらの学校の構造において、行為し学びながら経験される²⁰。専門学校あるいは芸術大学や大学は、特別な専門性をさらにはっきりと現わす。「自己形成のための施設」は、「成人学校」の性質として、「自然」、究極的には全体的な生活を、職業に就いている人間に対して透明にすべきであり、この人間を「精神的直観」へ導くべきであり、すなわち全体的な生活世界の構造化によって、その全体的な生活世界の人間学的根源を明確にすべきである²¹。ここではそれゆえ、人間を日常の行為から再び導いて連れ出すこと、より厳密には、人間にとって目前の日常性の精神的基礎を設定することが問題である。その限りでは、専門的・職業的生活についての反省としての「自然の直観」は、まさに「精神的直観」の産出、すなわち人間の精神の、直観および自己観察を意味する。

ハイラントによれば、「この生活（行為、「表現」）と思考との関連にとって、今やまさに『ヘルバの国民教育施設』の陶冶構想は、決定的である。」²² フレーベルは、1809年のペスタロッチーに関する研究報告およびカイルハウの案内書や『人間の教育』において、常にこの関連を強調していた。しかし今や、「ヘルバ・プラン」において、思考と行為のこの統一、その相互の関係は、あらゆる明瞭によって、陶冶理論的に展開され、対応する人間学から学校理論的および教授計画理論的帰結が示される。

だからフレーベルは、ヘルバの陶冶計画を、人間の生産性の中心から構想

する²³。概念での労作としての授業、生活世界の諸連関を系統立てることおよび概念化することとしての授業は、「創造」および「作業」の時間に貢献する。授業は、「自己創造」の「法則」の「認識」という目的に対する手段になる。「自己行為」のこの優性は、「諸原則」の最終の把握による、フレーベルの人間学ないし陶冶理論から生じる。その「諸原則」は、次の三つの項目から発する²⁴。

1. 宗教への陶冶、人間の教化
2. 生産的な実行力のための陶冶
3. 単純な認識と根本的な認識、生き生きした認識と十分な認識のための陶冶

ヘルバにおける教授は、午前中に行なわれ、その都度、午後の5時間は、「家のため、家政のため、物質的な産物の製造のための労作の時間」である。

ハイラントによれば、「あらゆる存在するものを自覚的な関係に置くための球体の思想に対応する、この人間学的・陶冶理論的な基礎づけの連関から、フレーベルは、『教授対象』（『人間の教育』の意味での『教科』）の目録および『国民教育施設』の三つの『学級』の構造をも導き出す。」²⁵ ともかく学級の関連は、構造的にはっきりしていないままである。ヘルバの生徒の年齢は、原則において、厳密に固定されていない。「公示」において、入学年齢として、7-14歳が想定されている。

フレーベルは、昇ってくる結果において、三つの学級を「基礎づける」学級(A)、「練習する」学級(B)、「仕上げて・応用する」学級(C)として特徴づけ、原則として学級Cが「表現する」学級として構想されているが、基本的にヘルバの計画も、カイルハウの「基礎づける教授」を提供すべきものであることが明らかになる²⁶。

ヘルバの教授領域の一覧表の中で、「基礎づける教授」の全体的な範囲を再び認識する²⁷。

1. 外界の観察（学級A、B 1部）
2. 言語練習と話し方の練習（A）

3. 言語領域の直観 (B 1 部)
4. 言語法則と言語形式論 (B 2 部、C)
5. 正書法 (A、B 1 部)
6. 言語表現 (B 2 部、C)
7. 読むこと (A、B 1 部、B 2 部)
8. 習字 (B 1 部、B 2 部、C)
9. 正しい数 (A、B 1 部、B 2 部、C)
10. 応用の数 (A、B 1 部、B 2 部)
11. 数計算 (B 1 部、B 2 部、C)
12. 形態論 (A、B 1 部)
13. 数量論 (B 2 部、C)
14. 網状の図画、図の考案 (A、B 1 部)
15. 自由なものにおける図画、形の考案 (B 2 部)
16. 自然の模写 (模倣) (C)
17. 色彩練習 (A、B 1 部)
18. 唱歌 (B 1 部、B 2 部、C)
19. 自然学 (地学、植物学、動物学) (B 2 部、C)
20. 地理学 (B 2 部、C)
21. 自然論 (C)
22. 工芸学、技術学 (B 2 部、C)
23. 人間学と (人間の) 歴史 (C)
24. 宗教 (A、B 1 部、B 2 部、C)

ハイラントは、この表から、「基礎づける教授」のための特別な教授領域を抜き出すと、本質的に『人間の教育』の教科課程が問題であることが明らかになる、と指摘している²⁸。もちろん、ヘルバの構想のもとでは、『人間の教育』の教科課程にあって欠けているものもある。

ハイラントは、「全部合わせて、ヘルバのための教授計画は、まさに生活世界の諸連関 (出発点は外界の観察である) の中にはめ込まれ、また宗教と結

びつく、基礎的教授領域の語、形、数というよく知られたペスタロッチーの三要素を示す」²⁹と述べている。これらの三要素は、言語（言語練習と話し方の練習、正書法／言語法則と言語形式論、言語表現、習字）、数学（正しい数、応用の数、数計算）と形態学（形態論、網状の図画、図の考案、色彩練習／数量論、自由な形態の図画、自然の模写／模倣）という学科群に対応する。しかし、フレーベルは、現実についてのこれらの形式的な要素を修得することに留まらず、宗教や外界の観察において事物の構造的なものの束ねられた次元を、「応用する」学級の諸学科、すなわち自然学（地学、植物学、動物学）、地理学、自然学、工芸学、人間学、歴史に、さらに発展して分化する。この連関を、フレーベルは『人間の教育』において演繹的に発展させ、いわば学問を生じさせる人間の精神の諸要素、すなわち宗教、自然、数学、言語、芸術という「基礎的教授（der fundamentale Unterricht）」の5つの領域の教科をあらかじめ整理しておいた。

しかし、ハイラントによれば、5つの領域の表現は、「基礎的教授」および「継続する教授」のための人間学的・球体哲学的基礎を提供したいにもかかわらず、フレーベルは、「ヘルバ・プラン」で原則において、両方の教授群にとって厳密に基礎づけのからみ合ったものを提出した³⁰。なぜなら、ヘルバの教授計画理論の課題は、「基礎的教授」と「継続する教授」を、協同も相違も明らかにする根源において基礎づけることにはないからである。「フレーベルは、人間を、自分自身と、世界と、人間の存在根拠（神）と媒介する球体哲学的基礎から教授を構想するつもりである。」³¹

フレーベルの教授構想の出発点は、自然の現実であり、また人間の創造の世界である。その中で生徒は生活し、それゆえ彼もその中で容易に努めて形造ろうとする。ハイラントは、「生徒は、現実、『外的なもの』を範疇的に開発し、『内面化し』、また同時に、自分自身を彼の内的なものにおいて開いて、内的なものを『表面化する』ことによって、彼はそれとともに、球体法則、『内的なもの』と『外的なもの』の媒介の法則に従って振る舞う」³²と述べている。しかし、対象物が形造られた全体の人間に関してまったく存在するこ

とによって、ここでは同時に外的なものおよび内的なものが指し示し、その都度他のものにおいて明らかになる限り、彼の成果、展開、作品において、この媒介過程は捉えられ、そして、そこで内面化すること、外的な現実を理解すること、人間の構造的な能力の、自己を外化することが統一され、統合される。

3 フレーベルの学校教育学

ハイラントによれば、フレーベルの影響は、幼稚園教育学と並んで、とりわけ『人間の教育』から発する³³。『人間の教育』は、フレーベル教育学の受容の中心に位置し、フレーベルの教育哲学および発達理論が含まれているその最初の部分に最も多くの注意が向けられる。そこで、実践的な遊戯教育学と理論的な『人間の教育』（体系的教育学）の全体的な意図の中に、全体的なフレーベルを把握するフレーベル像が成立する。「その際、それでもやはり、フレーベルの表向きの体系的著書の内部に支配的である、フレーベルの学校教育学は、考慮されないままである」³⁴とハイラントは指摘する。つまり、『人間の教育』の三分の二以上が、学校教育学に関する論述であるにもかかわらず、その部分が注目されていないとハイラントは考えている。

『人間の教育』における学校教育学は、厳密な意味で、学校の組織（制度）や学校の教授－学習過程（授業）を分析する体系的教育学ではなく、確かにまたカイルハウの案内書による先行する学校教育学の概要と同じように、陶冶計画や教授計画の理論に留まる。ハイラントは、「しかしフレーベルは、『人間の教育』において、カイルハウの『一般的に基礎づける』ないし『基礎的』教授の表現を始めるのではなく、人間学および教育哲学を始める」³⁵と指摘している。というのは、球体哲学的に基礎づけられた人間の本質の視界から、人間の陶冶の中心的な要素が導き出されるからである。最初の教授の基本領域としての、5つの構成要素は、宗教、自然、数学、言語、芸術である。

ところで、ハイラントは、フレーベルが、ペスタロッチーにおける基礎陶冶による人間教育を一生追求し続けた点に注目する。フレーベルによって「最

初の教授」あるいは「基礎的教授」、また「基礎づける教授」と名づけられた基礎陶冶は、フレーベルの学校教育学の一つの量的に最も広範囲な重点を表現する³⁶。彼の学校教育学の第二の重点は、「ヘルバ・プラン」との関連における1826年から1827年にかけてのカイルハウの危機という枠組において展開する³⁷。したがって「ヘルバ・プラン」は、フレーベルの学校教育学の省察における一つの転換点をも意味している。すなわち「ヘルバ・プラン」は、就学前の年齢において保育施設とともに始まり、教育の継続のための制度とともに成人を終え、全体的な低学年と高学年の領域を包括する、諸段階における学校諸形式の有機的組織、という構想である。フレーベルの学校教育学の中心は、一方では、カイルハウでの教育学であり、他方では、ヘルバのための計画とブルクドルフでの国民教育施設のための計画である³⁸。「カイルハウの一般ドイツ学園」は、フレーベルによるペスタロッチー教育学からの球体哲学の受容の成果を明示する³⁹。この受容は、形式的なものに対するあらゆる傾向のもとで、二つの展望、すなわち基本的なものと範疇的なもの、フレーベルの言葉では「基礎的なもの」と「一般的なもの」が義務づけられていた陶冶計画における止揚と統合を意味する。

フレーベルは、「基本的教授 (der Elementarunterricht)」の理論をまず第一にペスタロッチーから引き受けることができた。そして形式的にこれを、語、形、数の「基本的方法」の強調とともに、語学、形、大きさ、数の教授の維持を通して肯定し、構造的には大きく変え、生徒の生活世界・生活状況に規定された経験を出発点にした。そこで、カイルハウにおいて、最も近い周囲の事物の「自然と外界の観察」は、「第一の」、「基礎的な」教授の中心へ押し進む⁴⁰。しかし同時に、この「具体的なもの」は、「内的なもの」の、一般的な連関の「外的なもの」として球体的に理解されるべきであり、生徒の「自己活動」は、今や、彼の「一般的なもの」をこの法則によって明らかにするように、具体的なもの、主体的に体験したものを、省察や分析によって、「深めること」の中にある⁴¹。フレーベルの球体哲学は、学校の教授において、「基本的なもの」と「一般的なもの」が科学として生じうるように、問題の解決

を可能にし、主体的な経験と科学的な洞察を統合する。

フレーベルにとって結晶学の研究は、同時に彼の問題の理論的解決と「基礎づける教授」の決定的な手段を媒介した⁴²。立体幾何的に明らかになる結晶の諸形式は、同時に球体法則を直観的にわからせ、そのために具体的なものによって普遍的な一般的なものを明らかにする。

それにもかかわらず、フレーベルの学校教育学のこの第一の重点は、断片に留まる⁴³。継続し、「模範的な教授」の教授計画理論を表わすべきであった『人間の教育』の第2巻は、起草されず、一度も着手されなかった。明らかに、普遍的法則は、それによって個々の教科および専門科学の特別に具体的なものが把握されえないという基本的なものの傾向がとてもはっきりあった。少なくともこの連関についての概略を述べるための、『人間の教育』第1巻でのフレーベルの試みは、失敗した。陶冶とのこの連関における科学的な事柄の問題を、フレーベルは、ただ理論的に、球体哲学のための陳述において解明したが、専門の教授のために教授計画理論的には解明しなかった⁴⁴。

フレーベルの学校教育学の第二の中心は、学校の組織、とりわけ国民教育施設のための彼の計画である⁴⁵。科学的な教授としての「継続する教授」は、教授計画理論の断片に留まっていた。ヘルバおよびブルクドルフの国民教育施設の計画に、学校組織の構想、諸段階における学校全体の構想が、結びつけられる⁴⁶。カイルハウは、「基礎づける教授」や「継続する模範的な教授」、時々国民教育施設の学校類型の「応用する教授」も実践した。ブルクドルフの小学校は、すでに幼稚園の前形式のようなものを、しかしまさに学校段階として、すなわち3-7歳児のための計画されたヘルバの保育施設に相当する、4-6歳児の最初の学級として統合された、「基礎づける教授」を再び実践した。しかし本当は、核となる国民教育施設が成就しなかった。

しかしまさに、30年間のフレーベルの組織的な学校計画においても、再びフレーベルに対するペスタロッチーの影響の本質的な衝撃が明らかになるが、それは貧民教育である⁴⁷。ベツトヴィラーの「貧民教育施設」のためのフレーベルの計画は、このペスタロッチーの継承の中にある。

フレーベル独自の学校教育学は、『人間の教育』の一部として自己目的にはならず、また学校を生活から孤立させ、現実に対して遮断するのではなく、むしろ現実性、家庭教育、学校および教授を、あらゆる他のものの中に自己自身を再び見出し、自己を神的な根源において現実の世界から基礎づけるための球体法則によって、統一として見る⁴⁸。

フレーベル自身は、体系的な学校教育学を起草しなかった。学校教育学そのものは、フレーベルにとって究極的に論題ではなかった。というのは、フレーベルは確かに学校を『人間の教育』において概念として用いるが、彼は博愛家やペスタロッチーと同じように、学校を最高の教育施設と置き、学校の教授は自覚的な家庭教育とほぼ同義に置かれたからである⁴⁹。このことは、ペスタロッチーが時々置き忘れる思惟でもある。そこで、学校とそのため学校教育学は、究極的にフレーベルのもとでは『人間の教育』の一部であるが、まさに決定的なものである。とにかくフレーベルは、30年間家庭教師および学校教育学者であった⁵⁰。

むすび

フレーベルは、『人間の教育』において、少年期の教育は、職業教育との関連は持ちながらも、基本的に普通教育を行なうべきであると考えている。つまり、諸教科における作業は、人間の本質を少年の中に全面的に発展させ、表現させることだけを目的としている。だから、フレーベルは、少年初期の教育は、普遍的、基礎的な教授を中心にして、職業に直結する教授だけを行なうのではないと強調しているが、それは、彼が、少年初期の教育は、人間としての教育の基礎になるものであると確信しているからである。このような性格を持つ少年初期の教育は、いわゆる「基礎づける教授」を行なうことになるが、その後の学校構想において、この「基礎づける教授」を基礎として、学問や職業に直結していく「継続する教授」が考察されている。

「ヘルバ・プラン」は、7歳から14歳までのすべての子どもを対象とする基礎的統一学校の性格を有する国民教育施設の構想であった。また、「ヘルバ・

プラン」で注目すべき点は、国民教育施設に、母親および3歳から7歳までの男女の子どもたちのための「保育と発達の施設」が付設されるべきことが主張されていることである。つまり、ヘルバの陶冶構想は、3歳から7歳の保育施設から出発し、7歳から14歳までの国民教育施設があり、それに続いて、卒業後は、大学に接続するギムナジウムや職業教育のための施設などへの進学が考えられていた。

「ヘルバ・プラン」の陶冶構想は、時期的にはフレーベルのカイルハウの活動時期と密接な関係にあり、『人間の教育』の教科課程と重なり合う部分が多い。しかし、「ヘルバ・プラン」は、カイルハウにおける「基礎づける教授」の学校教育学よりも、人間の生産性の中心から構想し、表現する行為、産出をはっきり際立たせ、フレーベルのより広範な計画を暗示する。

ハイラントは、フレーベルの影響は、幼稚園教育学と並んで、とりわけ『人間の教育』から発すると考える。というのは、『人間の教育』における学校教育学は、陶冶計画や教授計画の理論に留まるものではあっても、球体哲学的に基礎づけられた人間学および教育哲学を開始しているからである。そしてハイラントは、フレーベルが、ペスタロッチーにおける基礎陶冶による人間教育を一生追求し続けた点に特に注目する。ハイラントは、フレーベルの学校教育学を中心は、一方では、カイルハウでの教育学であり、他方では、ヘルバおよびブルクドルフでの国民教育施設の計画であると指摘する。カイルハウの一般ドイツ学園は、フレーベルによるペスタロッチー教育学からの球体哲学の受容の成果を明示し、とりわけ直観の三要素からの出発が見られる。また、ヘルバおよびブルクドルフでの国民教育施設の計画は、学校組織の構想および諸段階における学校全体の構想が見られ、幼稚園の前形式のようなものも提示されている。

フレーベルの学校教育学は、体系的なものではなく、むしろ断片的なものに留まる。その理由は、フレーベルにおける学校は、常に家庭生活の延長上にあり、ハイラントも指摘するように、学校の教授は自覚的な家庭教育とほぼ同義だからである。つまり、「基礎づける教授」は、家庭と学校の結合とい

う観点から展開されているからである。したがって、フレーベルにおける学校教育学の構想は、自覚的な家庭教育が段階的に展開したものととも考えられ、その意味において、彼の学校教育学は、その基礎の段階として幼稚園を生み出す素地を持っていたと考えることができよう。

注

- 1 Vgl.F.Fröbel, *Ausgewählte Schriften*.Bd.2.Die Menschenerziehung, Hrsg.v.E.Hoffmann. (Pädagogische Texte, Hrsg.v.W.Flitner), Stuttgart:Klett-Cotta, 4.Aufl.1982,S.251. フレーベル、荒井武訳『人間の教育（下）』岩波書店、1964年、239頁、参照。
- 2 *ibid.*,S.251-252. 同上訳書、240-241頁。
- 3 *ibid.*,S.252. 同上訳書、241頁。
- 4 *ibid.*,S.252. 同上訳書、243頁。
- 5 *ibid.*,S.253. 同上訳書、245頁。
- 6 *ibid.*,S.254. 同上訳書、246頁。
- 7 Vgl.H.Heiland, *Friedrich Fröbel in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten*, Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, Reinbek bei Hamburg, 1982,S.72.
小笠原道雄『フレーベルとその時代』玉川大学出版部、1994年、206頁、参照。
- 8 F.Fröbel's *gesammelte pädagogische Schriften*, Hrsg.v.W.Lange, Abt.1,Bd.1, 1862, 1966,S.402. 小原國芳・荘司雅子監修『フレーベル全集』第三巻（教育論文集）玉川大学出版部、1977年、71頁。
- 9 *ibid.*,S.403. 同上訳書、71頁。
- 10 Vgl.*ibid.*,S.403.
- 11 *ibid.*,S.403.
- 12 Vgl.*ibid.*,S.404.
- 13 Vgl.*ibid.*,S.404.
- 14 Vgl.*ibid.*,S.405.
- 15 岩崎次男『フレーベル教育学の研究』玉川大学出版部、1999年、156頁。
- 16 F.Fröbel's *gesammelte pädagogische Schriften*, Abt.1,Bd.1,a.a.O.,S.408.
- 17 *ibid.*,S.25. 小原國芳・荘司雅子監修『フレーベル全集』第一巻（教育の弁明）玉川大学出版部、1977年、48-49頁。
- 18 H.Heiland, *Die Schulpädagogik Friedrich Fröbels*, Georg Olms Verlag AG, Hildesheim 1993,S.110.

- 19 Vgl. *ibid.*, S.110.
- 20 Vgl. *ibid.*, S.110.
- 21 Vgl. *ibid.*, S.110-111.
- 22 *ibid.*, S.111.
- 23 Vgl. *ibid.*, S.111.
- 24 *ibid.*, S.112.
- 25 *ibid.*, S.112.
- 26 *ibid.*, S.113.
- 27 Vgl. *ibid.*, S.113-114.
- 28 *ibid.*, S.114.
- 29 *ibid.*, S.115.
- 30 *ibid.*, S.116.
- 31 *ibid.*, S.116.
- 32 *ibid.*, S.116.
- 33 *ibid.*, S.82.
- 34 *ibid.*, S.82.
- 35 *ibid.*, S.83.
- 36 *ibid.*, S.152.
- 37 *ibid.*, S.152.
- 38 *ibid.*, S.152.
- 39 *ibid.*, S.152-153.
- 40 *ibid.*, S.153.
- 41 *ibid.*, S.153.
- 42 Vgl. *ibid.*, S.153.
- 43 *ibid.*, S.154.
- 44 *ibid.*, S.154.
- 45 *ibid.*, S.154.
- 46 Vgl. *ibid.*, S.155.
- 47 *ibid.*, S.155.
- 48 Vgl. *ibid.*, S.155.
- 49 Vgl. *ibid.*, S.152.
- 50 *ibid.*, S.152.

Summary

A Study of the Conception of School Pedagogy in Fröbel

Seikō Toyozumi

Fröbel's pedagogy develops at first as he lays emphasis on the conception of school pedagogy. Because he thinks that the education reform is realized by the conception of school before he turns his attention to the importance of the conception of childcare and home reform.

In this paper, first I explain Fröbel's opinion which means that the education of juvenile period puts universal education into practice as I pay attention to the end of "The education of man". Next I study how the basic instruction in Keilhau inherits the conception of national educational facilities in "Helba Plan". Last I survey the whole conception of Fröbel's school pedagogy from the viewpoint of the school pedagogy of "The education of man" and the plans of national educational facilities in Helba and Brugdorf, as I am based on Heiland's theory.

Accordingly, the purpose of this paper is to explain that Fröbel's basic instruction takes a leading part in his school pedagogy of "The education of man" and also in his plans of national educational facilities and that the subjects in his conception of school is developed from the viewpoint of connection of home with school.